

令和7年度 自己評価及び学校関係者評価

令和8年3月19日

札幌市立平岡南小学校

1 本校の教育目標

どの子ども幸せな学校 『笑顔いっぱい 挨拶いっぱい 夢いっぱい』

2 本年度の重点目標

一人一人に目を向けて「ほめる 認める 信じる」

3 自己評価結果に対する学校関係者評価

分野	評価項目	自己評価		学校関係者評価	
		達成状況	改善の方策	自己評価の適切さ	改善策の適切さ
『学心力の育成』 〜個別最適な学びと共同的な学びの一体的な充実〜	<ul style="list-style-type: none"> 基礎基本的な知識及び技能の習得 話し合い活動、表現活動、協働作業の充実 	B	<ul style="list-style-type: none"> 子どもたちの「考えたい」「やってみたい」という意欲を大切に、自ら疑問や課題をもち、主体的に解決する学習を目指してきた。 研究部が中心となり、「つなぐ」をキーワードに、他者と共に学びを深める場、協働的な学びの場が実現するように授業改善を進めてきた。自分の考えを伝えることに苦手意識をもっている児童が多いのでさらなる積み重ねが必要である。 どの子ども「わかる・できる・楽しい」を実感できるように家庭と連携して学習の習慣を身に付けていくことで、基礎学力の定着を図ってきた。 教科担任制を積極的に導入し、個々の専門性を生かした指導と子どもの実態把握につなげていくことは今後の課題である。 	A	A
	<ul style="list-style-type: none"> ICT・1人1台端末（タブレットPC）の活用 	B	<ul style="list-style-type: none"> ICTの特性・強みを生かした一人一台端末の活用で協働的な学びと個別最適な学びの充実を図ってきた。多様な学びに有効活用できる学習ツールとして、子どもが学習の目標に合わせて一人一台端末を活用できるように、教員間で活用の可能性について共有していく機会を来年度さらに設定していく必要がある。 週に1回、タブレットの持ち帰りの仕組みを整えた。家庭での学習に一定の効果を見出している。家庭への持ち帰りに合わせ、情報教育（ネットモラル指導）のより一層の充実を図る必要があり、その内容を家庭と共有することでインターネットトラブルの未然防止や一人一台端末の家庭での有効活用につなげていくことが課題である。 	A	A
	学校関係者評価委員による意見		<ul style="list-style-type: none"> 家庭や児童会館等で、タブレットを使用し、熱心に学習に取り組んでいる姿が多くみられるようになってきた。ただ、学習課題以外の使用について課題があるように感じる。使い方については学校と家庭で協力して指導していく必要がある。 自分の意見を言葉にすることが難しい児童に対して、正解や不正解を問わず自由に考えを表出できる場の設定や、タブレットを活用し、スタンプ等で自分の思いや考えを表出するなど、スモールステップでの伝える力の向上を図っていけるとよい。 		
大切に、 『豊かな心の育成』 〜命を大切に、 多様性を認め理解し合	<ul style="list-style-type: none"> 自他を尊重する意識の醸成 いじめをしない、させない指導 	A	<ul style="list-style-type: none"> 一人一人の子どもに対してきめ細やかな見取りを土台とし「ほめる 認める 信じる」姿勢を大切に、子ども一人一人が「大切にされている」と感じる場面を充実させることをあらゆる教育活動の場で意識してきた。自分が大切にされている（自己肯定感）、必要とされている（自己有用感）思いを醸成し、他者意識（他者へのいたわり）をさらに高め持続させていくことが必要である。 いじめを絶対に許さないという教職員の毅然とした強い姿勢と温かい雰囲気と笑顔のある学級が、一人一人が挑戦できる場、自分の成長を実感できる場、自分の存在価値を認められる場となるようにして、自他を尊重する意識を醸成してきた。また、いじめに対して組織で対応していくために毎月いじめ防止定例会議を開催し、情報共有と対応の検討を重ねてきた。今後も「未然防止・早期発見・早期対応」を徹底していくと共に、道徳教育の充実を図っていく。 	A	A

	<ul style="list-style-type: none"> 特別活動の充実 ～行事、児童活動、異学年交流～ 明るく元氣な挨拶の指導 	A	<ul style="list-style-type: none"> 学校行事や児童会活動等における子どもの主体的な活動を推進して、発達の段階に応じて子ども自らが役割と意識をもって学校生活をよりよくしようとする態度を育成してきた。 そよ風活動での異学年交流や運動会や学習発表会での交流を通して、互いに認め合ったり、仲間と支え合ったりすることで、憧れられる上級生と、それを目指す下級生の関係を築いたり、共に創り上げていく楽しさを感じたりするなど他者との関わりを通して成長を促してきた。 「明るく元氣な挨拶」の取組を学級学年、児童活動で継続、推進してきた。今後とも指導を継続し「されるからする」ではなく、「するからされる」といった自発的な姿勢を育てていく。 	A	A
	学校関係者評価委員による意見		<ul style="list-style-type: none"> 学校がいじめを許さない姿勢を明確にし、道徳教育の充実を図っていることに心強さを感じる。 自発的な「明るく元氣な挨拶」の推進は、人と人との関わりを大切にし、円滑な人間関係の構築につながっていくので今後も継続してほしい。 学校以外でも「ほめる」を意識し、子どもたち同士が思いやりの気持ちをもって関係を築いていくことができるように、学校と家庭、地域との情報共有を大切にしていけることが重要である。 子どもたちを取り巻く環境はどんどん複雑になってきている。様々な背景を抱えている子どもたちに適切な対応をしていくために、学校、家庭、地域の連携はより一層大切になってきている。 		
分野	評価項目	自己評価		学校関係者評価	
		達成状況	改善の方策	自己評価の適切さ	改善策の適切さ
「健やかな体の育成」 ↳運動機云々健康意識を高める指導の充実	<ul style="list-style-type: none"> 運動機会の創出と健康への意識の向上 	A	<ul style="list-style-type: none"> 三間（時間・空間・仲間）を大事にして外遊びを推奨し、日常的に運動機会を創出してきた。なわとび、縄跳び表現、跳び箱・マット月間での取組等、継続した取組で楽しみながら体力向上を目指すことができるようにするとともに、6年間での育ちとして継続していくことで、成長が自信となってさらに運動の取組が推進していくようにしていく。 子どもたちが率先して運動に親しむための必要な運動アイテムの整備を進めていく。 	A	A
	<ul style="list-style-type: none"> 基本的な生活習慣の確立 	B	<ul style="list-style-type: none"> 基本的な生活習慣づくりを、栄養教諭、養護教諭の専門性を生かしながら、学校と家庭との連携を強化し推進してきた。 家庭との連携については、電話での連絡、HP、すぐーる活用などを通してより深めていく必要がある。 	A	B
	学校関係者評価委員による意見		<ul style="list-style-type: none"> 結果だけではなく、日々の挑戦や成長を認めていくことで、子どもたちが自信をもち、主体的に健康への意識を高めていくことを期待している。 縄跳びを熱心に放課後も取り組んでいる姿がある。体力だけではなく、朝食を食べていない等の話を児童から聞くことがあるので、生活習慣について家庭と連携していく必要がある。 		
「信頼される学校」 ↳今日的な課題への取組	<ul style="list-style-type: none"> 「小中一貫した教育」に向けた取組 	A	<ul style="list-style-type: none"> 平岡中学校、清田小学校をパートナー校として、教育課程、各育成プログラムや取組を共有してきた。 パートナー校間で全教職員がグループに所属し、札幌市教育研究推進事業や合同研修の機会での交流し、具体的な活動の構築につなげることができた。 令和9年度よりスタート予定のCS事業に向けて、計画と準備を進めてきた。 	A	A
	<ul style="list-style-type: none"> 一人一人の教育的ニーズに応じた特別支援教育 	A	<ul style="list-style-type: none"> 一人一人の発達や実態に即した児童理解により、子どもの実態に応じた指導内容や指導方法を工夫してきた。 全職員がインクルーシブの視点に立った学びへの理解を深め、一人一人の子どもにとって最適な学びを提供できる教育のプロとしての自覚を高めてきた。 これまでの当たり前を見つめ直すことで、どの子にとっても最適な学びを提供する学びのユニバーサルデザインについての理解を深めていく必要がある。 	A	A
	学校関係者評価委員による意見		<ul style="list-style-type: none"> 全職員で誠実なアップデートを続けていることに、学校としての強い志と信頼を感じている。 子ども一人一人に適切な対応が求められている今だからこそ、子どもを地域で育てるという視点に立ち、地域との連携を大切にしていけるべきである。 CS事業について、家庭、地域にもっと発信していくべきである。 		